

17) フウロソウとゼラニウム

フウロソウはハクサンフウロの別称で、フウロソウ科の植物を総称して呼ぶこともある。この仲間は07-03-03で紹介しているゲンノショウコやタチフウロ、グンナイフウロ、タカネグンナイフウロ、ヒメフウロ、アサマフウロ、チシマフウロ、ビッチュウフウロ、イヨフウロなど地方変異が多く、どれも美しい5弁花を開く。ハクサンフウロはフウロソウ科の多年草で、本州中部山岳の高山の草地に生える。草丈は約50cmになり、長い葉柄のある葉は掌状に5深裂して対生し、葉裏の脈の上には毛が生えている。地下茎は短く根は肥厚する。7~8月ごろ茎頂に花茎3cmほどの紅紫色の5弁花を開く。和名の由来は石川県の白山に産するため、中部山岳地帯では普通に見ることができる。別称としてはアカヌマフウロで、学名は『*Geranium yesoense*』、属名はツルに由来するギリシャ古名で、3cmほどの細長い果実を、ツルのくちばしに例えたもので、種小辞は北海道の意である。

一方ゼラニウムはフウロソウ科テンジクアオイ属の多年草で、原産地はアフリカ南部、約250種が知られている。観賞用として栽培され、現在も品種改良が盛んに行なわれている。茎は高さが30~80cmになり、多肉質の茎は基部が木化し、全草に悪臭がある。長い葉柄のある葉は心臓状の円形で、浅い切れ込みがあり縁には鈍鋸歯があって、葉の表面には褐色の馬蹄状の斑が入るものもある。和名の由来はフウロソウの属名をそのまま借用したものである。ゼラニウムは現在ではテンジクアオイ属の植物であるが、かつてはフウロソウ属(=ゼラニウム属)だった。ところが1787年にフランスの植物学者L'Heritier(レリティエ)が、5枚の弁花のうち上部2枚が小さく、雄蕊が5~7本しかない植物を『ペラルゴニウム属』としたことにより、ゼラニウムはペラルゴニウム属となった。しかし現在でも旧属名のまま呼ばれているのである。学名は『*Pelargonium hortorum*』で、属名はコウノトリのことで、果実の形状がコウノトリのくちばしを思い起こさせることによる。種小辞は「変色した」という意味である。またイギリスでの呼称は『fish geranium』である。

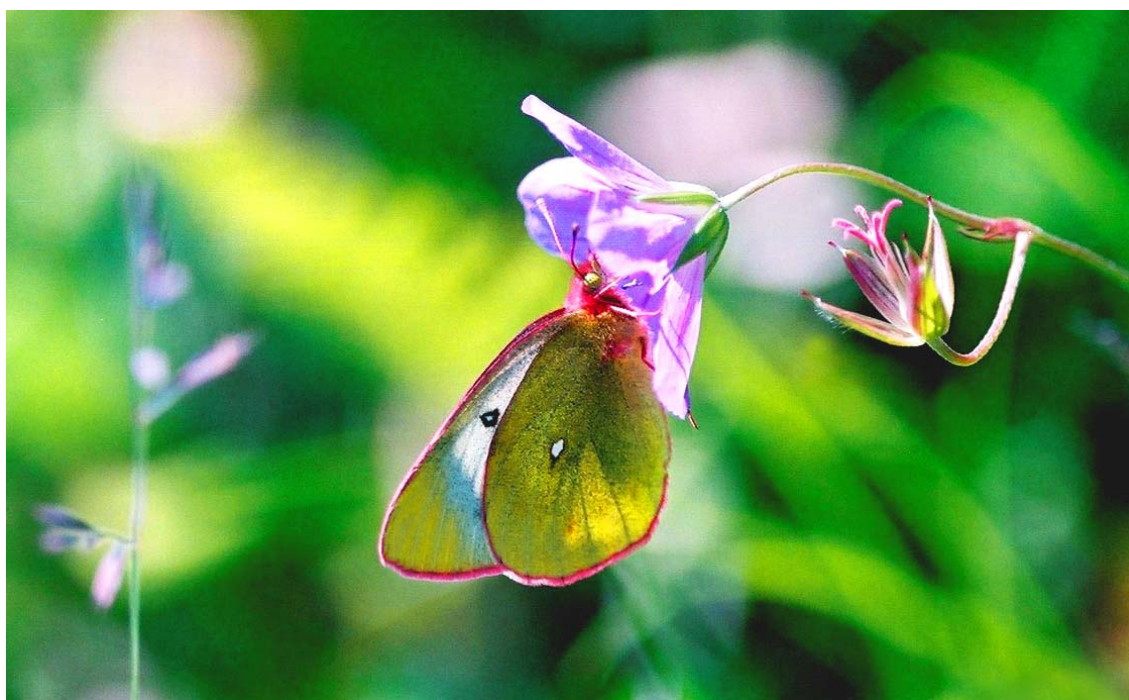
ゼラニウムは17世紀にケープ植民地からオランダに導入され、17世紀末期のライデン植物園のリストにはすでに10種類に及ぶ種名が記録されている。その後1701年にはイギリスとフランスにもたらされ、クックの第2次探検隊に参加したイギリスのFransis Masson(フランシス・マッソン)は1772年南アフリカに上陸し、50種類ほどの品種を発見してイギリスに送り、やがて19世紀のヴィクトリア女王時代に大流行することとなった。日本へ伝来したのは幕末頃で、当初は花よりも葉の斑に人気が集まり、明治の末にはブームとなって、郵便葉書が1銭5厘だった時代に850円で取り引きされた品種も現れたという。花色は実に多彩で、赤、桃、白、淡桃、淡紅、絞りの他、四季咲性で八重咲のものもある。世界でも最も多く栽培されている植物の一つで、特に鉢やポットに植えられて窓辺を飾ることが多い。



タチフウロ、フウロソウの仲間は変異が多い。亜種として固定されているものもあるが、単なる地方変異として扱われているものも少なくない(長野県軽井沢町)。



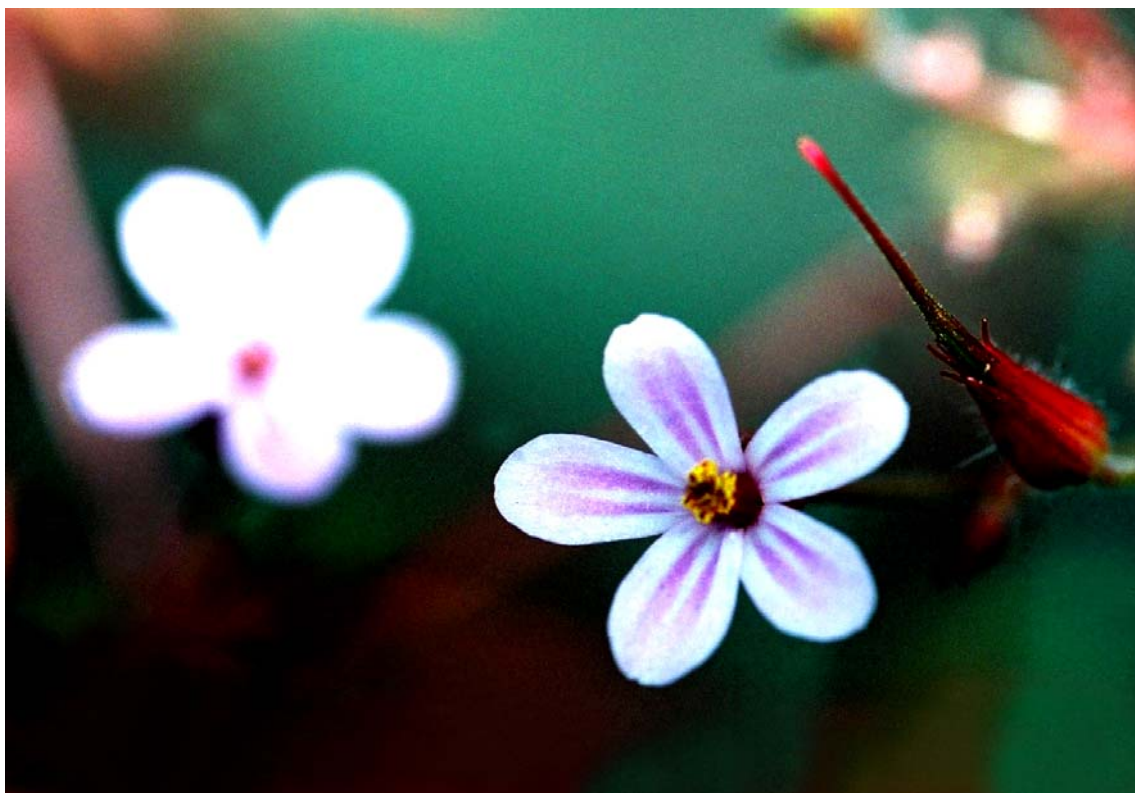
タチフウロの学名は『*Geranium krameri*』である(長野県蓼科高原)。



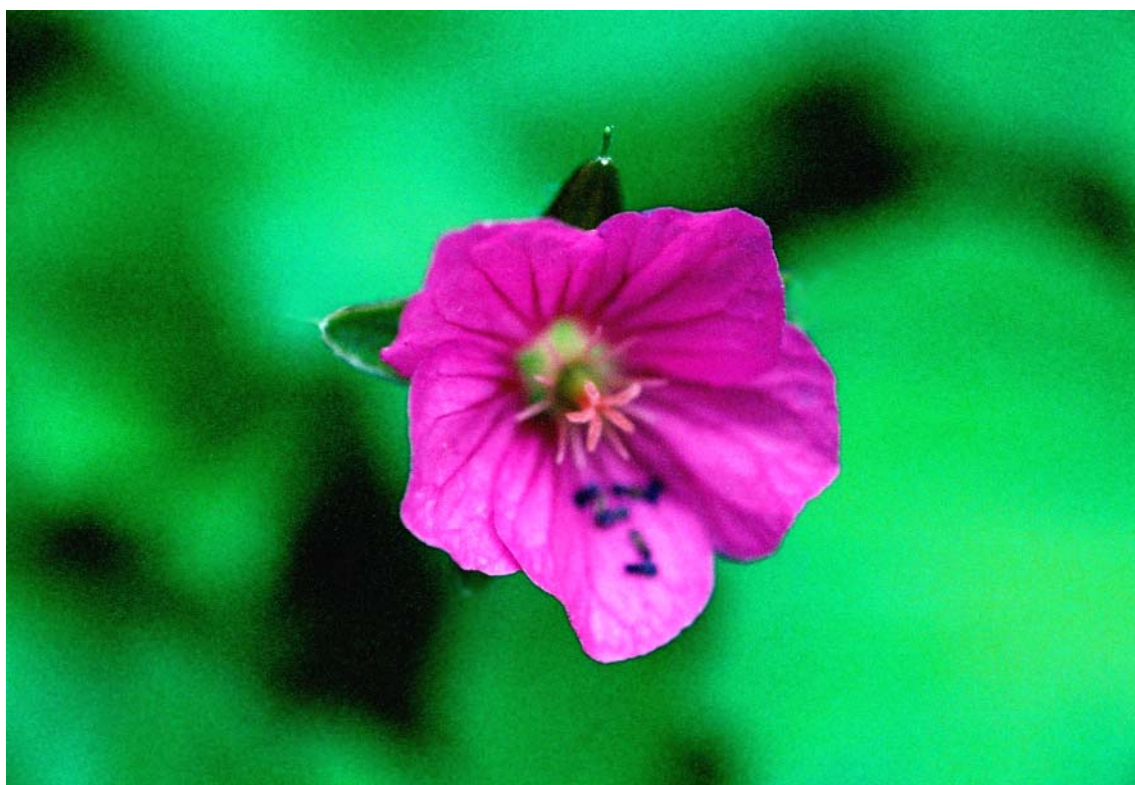
アサマフウロにやってきたミヤマモンキチョウの♀。ミヤマモンキチョウは日本を代表する高山蝶で、浅間山周辺と北アルプスの2,000m以上の草原地帯に生息する(長野県湯の丸山)。またアサマフウロの学名は『*Geranium soboliferum*』である。



ハクサンフウロはフウロソウの中でも特に華麗な花を咲かせる(長野県蓼科高原)。学名は『*Geranium yesoense var. nipponicum*』なお var.以下の *nipponicum* は亜種名である。



ヒメフウロソウは花卉に2本の紅紫色の線が現れるところからすぐ識別できる。石灰岩地帯を好み、全草に塩を焼いたような臭気がある。学名は『*Geranium robertianum*』である。



こんなに色の濃いフウロソウもある(神奈川県箱根町湿性花園)。



これはウロソウとして販売されていたものだが、外国産のように思える(栽培品)。



ゲンノショウコ(07-03-03)のシロバナ種。下痢止めの薬草として知られているが、漢方薬には登場しない、日本独自の民間薬としてつい最近まで救急箱に納められていた(埼玉県嵐山町)。



高嶺ゲンナイフウロ、学名は『*Geranium eriostemon* var. *reinii*』(神奈川県箱根町湿性花園)。



アケボノフウロソウはロシア連邦のカフカスに分布するフウロソウで、学名は『*Geranium sanguineum*』である（神奈川県箱根町湿性花園）。



この花は深谷の販売店で「ゲラニウム」として売られていたもので、出自は不明である。



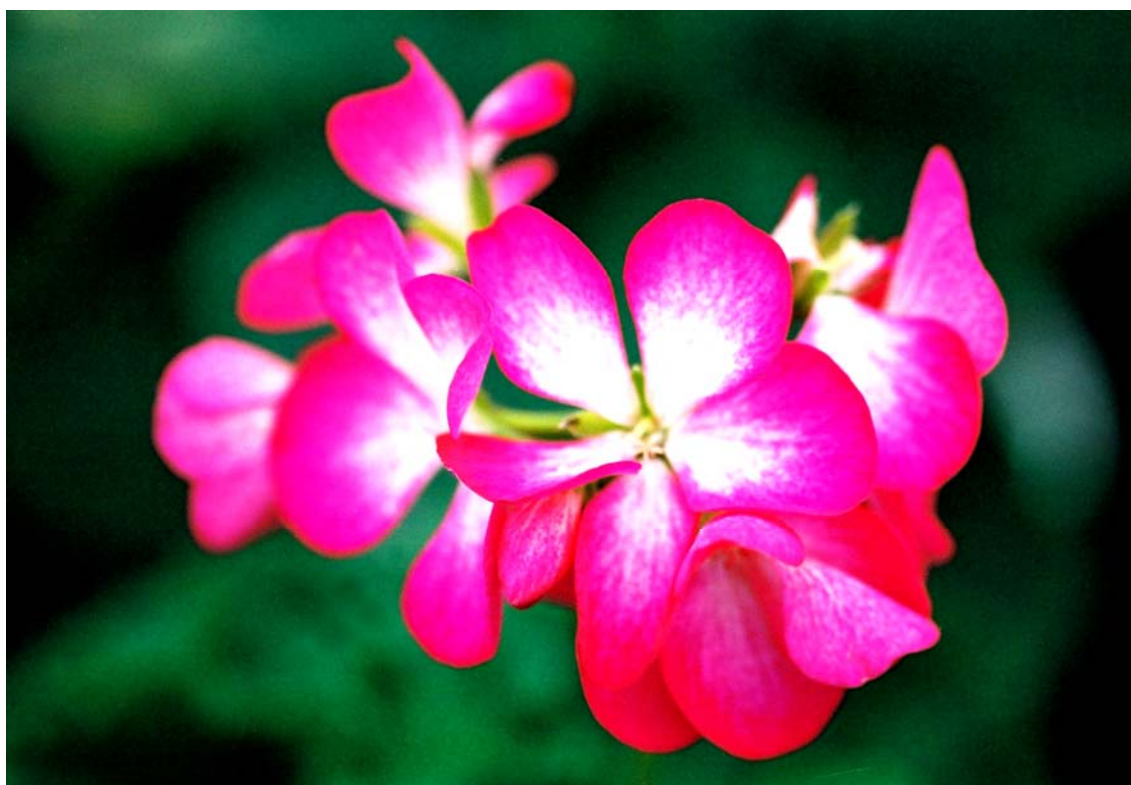
日本で一般的にゼラニウムと言われているものは、すべて園芸品である。全草に臭気があり、これを嫌う人も多いが、ヨーロッパではアルプスのプチホテルの窓辺を美しく飾っている。



ゼラニウムは花色の変化が多く、濃ピンクから覆輪種までさまざまである。



ゼラニウムの原産地はアフリカ南部で、これを最初にヨーロッパにもたらしたのはオランダ人だったが、やがてイギリス人も本国へ持ち帰り、その後ヴィクトリア女王時代に大流行した。



ゼラニウム、底白とピンクのバランスがよく広く好まれているタイプである。

[目次に戻る](#)